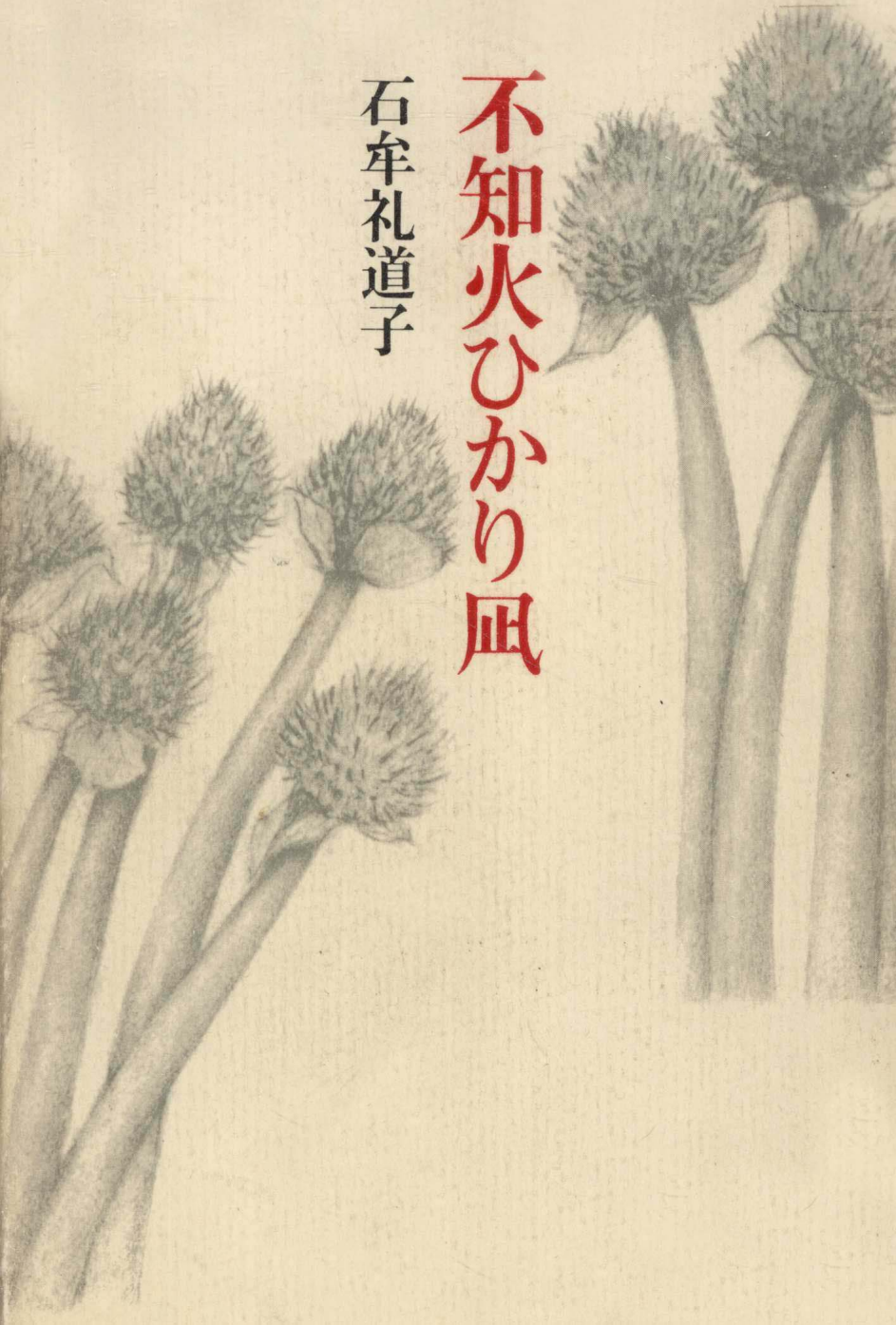


不知火ひかり風

石牟礼道子





不知火ひかり風
石牟礼道子

筑摩書房

しらぬい
不知火ひかり凧

©石牟礼道子
一九八九

一九八九年十一月二十五日 第一刷発行

著者 石牟礼道子

発行者 関根栄郷

印刷 厚徳社

製本 矢嶋製本

発行所 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一六一四
振替東京六〇一四一三三
電話東京五六八七二六八〇(営業)
五六八七二六七〇(編集)

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

Printed in Japan ISBN4-480-81275-X C0095

不知火ひかり唄*目次

不知火ひかり凧

遠い道

夢のさくら

山恋い

お寺のまわり

塞^{さい}の神

ご命日

日月の愁い

津軽考 (1)

津軽考 (2)

津軽考 (3)

5 10 15 21 26 31 36 41 46 51

しゅうりりえんえん (1)

しゅうりりえんえん (2)

一里塚としての法廷

親の家

花の香る国

妻という芸術家

気品高い生きものの母

九重にて

ニングル

緑の宮の川

湖の上の藤

お国のために

小さな狐

56 61 66 72 77 82 87 91 96 102 107 112 117

砂防ダム (1)	122
砂防ダム (2)	127
風土と学問と詩と	132
石垣	137
雨の日に源氏を (1)	142
雨の日に源氏を (2)	147
雨の日に源氏を (3)	152
歴史の呼び声	158
山の上の寺	163
清和村浄瑠璃行 (1)	168
清和村浄瑠璃行 (2)	173
清和村浄瑠璃行 (3)	178
清和村浄瑠璃行 (4)	183

努力目標	188
地の中の鈴 (1)	193
地の中の鈴 (2)	199
靈性へのささめき	204
夢の光	209
花のまぼろし	232
姫おましょ	217
狸の子孫	222
神曲	227
河口から	232

赤い花

夕陽

花の上の寺

海は雨、雨

海を拝む 山を拝む

*

あとがき

装画・さし絵 飯尾都子

263

257

252

247

242

237

不知火ひかり風

不知火ひかり風

遠い道

東京の友人宅への道順を、途中で電話をかけかけ、違う電車に乗ったりもするが、なんとか辿りつけるようになった。

長足の進歩だと彼女にからかわれるけれど、電話は困る。自分はベルが鳴ると心臓が飛び出すような思いをするのに、こちらからかければ、よそさまへかかってしまうのである。周章狼狽恐縮しきった末に辿りつく。

この友人、札つきの方向音痴のわたしを訓練しようと思っっているらしく、教育効果が出て来たと本人も思う。やむなく東京ゆきが始まってから、二十年くらいは経ったので、歲月というのは意義がある。ビルの林立と、車や人の洪水の中に立ち往生していて切実に思い出すことがある。

その方は終戦前まで、満州（中国東北部）の奥地で学校の先生をしておられた。お嫁さんを郷里から貰うことになり、めでたく式を済ませ、新婚旅行を兼ねて赴任地へ戻られた。

玄界灘の船旅も終り、汽車はひた走りに大陸の曠野を走り続ける。

二日目に入った。目的地はまだまだ遠い。三日目に入った。楽しみにしていたお嫁さんの顔が二日目あたりから曇りはじめていた。草深い郷里を離れ、早くもホームシックになったかと新郎は思った。

するうち彼女の双眸に涙がふくらみ、うつむいていたかと思うと、膝が濡れはじめたではないか。これは何か機嫌を損じたかと、周囲の目も気になって、若い夫は、おろおろと問いたでした。お嫁さんは絶句がちにこう言った。

……あの……、どこまで往たても、山が、山が、いつちよも、見えませんもん……
「これにはどう慰めたものか、困り果てましてなあ。山を見せようにも、あそこあたりにや、山ちゅうのが無かですもん。考えてみれば、どこを向いても、山のある所に育つとるもんですけん」

話を伺ったのは三十歳前後だったが、どこにも山がないというのは、わたしにも想

像の外の風景であつた。三方が山で、西に海が展けてゐる所に育つたので、泣き出したいほどな、山もみえない曠野が世界のうちにあるうとは、地図など見たところで思ひ浮かばなかつた。その頃のわたしは、水俣から鈍行で三時間近くかかる熊本へ二へんくらい出たことがあり、カルチャーショックとか、智恵熱を患つたほどであつた。

先頃テレビで、シルクロードの番組を見ていて、このお嫁さんのことを思い出した。小さな画面にうねる沙漠は美しかつたが、なんの予備知識もなしに彼の地のどこかに立つとしたら、氣も遠くなり、どこへも電話などかけられない。

けれどもまた考えるに、永い歴史の時間を経て、大沙漠の砂嵐の下などから、大地へのひっかき傷のような一筋の道が現れるのを見てみると、亀がどこにいても、海の方角を探し当てるのと同じように、わたしにも陸棲動物としての本能が少しは甦るだろうか。

同じ種族の居る、途方もない遠い地点を、嗅ぎ当てて往つたようなし、の跡に見入っていたら、大山岳を横切る古道が、たにぞし谿底に向かつて崩壊するのを、テレビは望遠レンズらしいのでとらえていた。遠い歴史の目盛りがそのとき、動いたという氣がし

た。道というもののほど、人間の劇を奥深く表現しているものはない。

仮にシルクロードをひとりで辿り直さねばならないとしたら、自分の資質をどう發揮できることだろう。途中であえなく遭難するにしても、大都会で車にひかれるよりは、曠野が墓場になるのだから、その方がよいかもしれない。

というようなことを感じていることもあつて、ここ十年ばかり、我が家でごく小人数集まつて「不知火海百年の会」なるものをやっている。百年などといえば大変そうだが、いちばん小さな距離から、何を見て育ったのか、親や知りべの古老から聞いて覚えていることを、思い出し引き出し、生活全般にわたつて、語り合つてみようというわけである。

ある時、川についての思い出を出してみた。小さな町だから川も可愛らしい。町の端っこを貫流している水俣川の上流は二俣になつていて、水股という古名の由来でもある。長い方の上流から計れば十九キロぐらい、川口の幅は百メートル弱である。語り合つた者たちは川口一キロあたりの住民である。

もつとも生々と語られたのは、鋏が毛むくじらの川蟹、津蟹ツガネについてであつた。最下流に住むわたしも、今は水銀の底になつている渚で、小岩の底に穴を掘つてゐる

のを掴まえたことがあるが、古い、もと男の子組の経験は爆発的で、川口組と三百メートル上の流域、五百メートル上の流域、一キロ上の流域組とは、蟹の生態も獲り方も、獲るための道具の作り方に至るまで、微妙にちがうのである。

そのことをはじめて知ってお互い感心したが、一筋の川は幾筋もの道と交差していて、人も生物たちも植物もあらためてなんと多様な姿で浮上してくることだったろう。

(85・3・15)

夢のさくら

心に灼きついている東京の未明の景色がひとつある。丸の内ビルの一角で水俣の患者さんらと、路上の脇にじかに寝ていた時期があった。

真冬で、雪のあとの路面が凍りつつあるなど思われる未明だった。さすがの大都市も車の往来がしばらく途絶えている。二十世紀末の哲学の冬、などと思うのであったが、骨も凍る感じで、古毛布をくるみつけてもしんからは寝つけない。

するうち、トタン板でもひっかく様な、きりきりというような小さな軋り音が、枕辺近くの地面から伝わってくる。ひとつはそれで浅い睡りを醒まされたい。

頭をもたげて、明けやらぬ薄明の地面を見やっていたら、小さく二つ光るものが見え、黒い野良猫だということがわかった。